

会議名 第2回ニセコ町総合計画見直し検討委員会

開催日	平成28年3月2日	会議時間	開会 AM・PM 3:00 閉会 AM・PM 5:30
会議場所	ニセコ町民センター 小ホール	記録者	矢元あみ
出席者	<p>検討委員会委員 齊藤海三郎委員長、上野菜月委員、佐々木淳委員、佐々木眞理委員、鈴木 宏委員、竹石成樹委員、坪井 訓委員、平島義彦委員、牧野雅之委員、吉川洋子委員</p> <p>事務局 ニセコ町企画環境課 山本課長、佐々木係長、前川主任、矢元主事 受託事業者 有限会社コミュニティ研究所 梅田氏</p>		
会議日程	<p>1 開会</p> <p>2 議事</p> <p>(1) 第1回検討委員会 会議報告 (資料1-1)</p> <p>(2) 第1回検討委員会における指摘事項と対応方針(案) (資料1-2)</p> <p>(3) パブリックコメント結果報告 (資料2)</p> <p>(4) 総合計画見直し案について (資料3-1、3-2)</p> <p>① 戦略ビジョン「11住民みんながまちづくりを考え、活動します」の見直し結果</p> <p>② 計画(案)の全体検討</p> <p>3 その他</p> <p>4 閉会</p>		
会議内容	<p>《齊藤委員長あいさつ》</p> <p>・2回目の委員会が、最後の機会となるので、活発な議論をお願いしたい。</p> <p>《議事》</p> <p>(1) 第1回検討委員会会議録報告(佐々木係長より説明)・・・資料1-1</p> <p>(2) 第1回検討委員会における指摘事項と対応方針(案)(佐々木係長より説明)・・・資料1-2</p> <p>(3) パブリックコメント結果報告(佐々木係長より説明)・・・資料2</p> <p>(4) 総合計画見直し案について(山本課長より説明)・・・資料3-1、3-2</p> <p>①戦略ビジョン「11住民みんながまちづくりを考え、活動します」の見直し結果について</p> <p>・山本課長より説明後、承認を求めたが、齊藤委員長より、その内容が全体の随所に関わっていることなので、全体議論の後で、再度この点に関する検討を行うこととしてはどうか提案があり、議論を先に進めることで、了承が得られた。</p>		

②計画（案）の全体検討

- ・前回の案に対する修正内容を中心に説明を行った。

《質疑応答》

質疑等なし

《意見交換》

佐々木（眞）：(1)P36 戦略ビジョン3のシナリオの中で再生エネルギーを生み出し使うとあるが、エネルギーそのものの節約が前提にあるべきで、そのことへの言及が不十分。(2)P49 戦略推進プラン3-④はごみを出さない努力が前提にあるべきで、そのことへの言及が不十分。(3)P69 戦略推進プランの8-④では、観光客が市街地に来るための送迎サービスなどの仕組みが必要。(4)P130～131の平成23年度実施アンケート Q4/Q6で、地元消費者の購買意欲が示されているので、それが可能となる条件づくりに言及すべき。

梅田：(1)の指摘については、なるほどと思う。(2)については、3Rのリデュース（排出抑制）を示してあるが、なお不十分か。(3)については、8-④の取組の中で具体的に検討するアイデアと思う。(4)についても、関連する施策の取組の中で具体的に検討していくことになると思う。

【ごみの減量について】

齊藤：P49の3Rに関する文章は、論理的におかしい。それと、町はリサイクル率の向上を目指しているが、ごみの排出抑制が前提として重要。町は、リサイクル重視に偏っているのではないか。

牧野：3-④のタイトルを変更してはどうか。説明文では、発生抑制の内容も入っているので、内容に合った表現にしてはどうか。

齊藤：ごみの多くはプラゴミだが、製造や流通の場面でも、プラ容器が多過ぎる。これも問題だ。

梅田：プラゴミの発生を少なくする施策を示すべき、ということか？

佐々木（淳）：商品流通のしやすさのために、誰かが容器コストを負担しなければいけないが、現状では、生産者が容器コストを負担している。

佐々木（眞）：包装が不要な売り方があるといい。かつて、豆腐を鍋で買いに行ったように。そのようなお店があると、かえって注目されるはずだ。

梅田：プラごみが出ないようにするために、生産者、流通業者、消費者各々の関わり方を検討する、ということをつけ加えるのがいいか？

山本：今の「3R」表記が、現実的などころと思うが、どうか。

齊藤：ニセコ町は、環境モデル都市を目指しているのだから、ごみ問題は重要であり、この点は深めてほしい。

山本：では、書き方を検討したい。

吉川：ごみから再生エネルギーが回収される割合が高くなるのであれば、そのような出口重視の考え方もあると思う。それであれば、消費者もリサイクルしやすいような分別などによって関わるところがあって、消費者の立場としての貢献もできる。プラゴミがどの程度エネルギーとしてリサイクルされているのかについての、

データはあるのか？

佐々木（淳）：塚越産業からのデータがあるなら、公表してもらえれば良い。

佐々木（一）：担当課に確認したい。

梅田：塚越産業の分別作業を見学して話を聞いたことあるが、実態としては、ダメごみが、資源化を阻む大きな問題となっているとのことである。

齊藤：塚越産業の見学は可能なのか？

梅田：塚越産業では、学校からの見学はあるが、一般住民の見学も歓迎したい、とのことだった。

牧野：前回問題提起した商工業の修正について記述がなされたので、ありがたい。資源ごみが役場裏のガレージに持ち込まれているが、直接塚越産業に持ち込む仕組みの方が回収時にロスが少なくて良いのではないか。

【環境保全型農業における横断的施策の組立について】

吉川：P77～戦略推進プラン（13）健康・医療について、健康の記述はもっともだが、農薬と健康との関係について施策に表現されていないので、分野横断的な施策が必要と思う。また、長野県飯田市の例だと思うが、高齢者が無農薬野菜を作って健康になっている。また、長野県上田市真田町では、学校給食の野菜を近隣の無農薬野菜に変えたことで、子どもたちの心身の健康にも良い影響を与えていると聞く。ニセコにとっても参考になると思うが、ニセコの農地活用の実状には合わない、という意見も聞いている。いずれにしても、縦割りの政策体系を超えて横に連携する仕組みができないか。

坪井：ニセコ町役場農政課は、減農薬の取組が消極的であるように見える。それは、農家への配慮からの姿勢と思うが、減農薬の取組について、農業者の佐々木さんは、どのように思うか？消費者は、多少価格が高くても、農薬をカットした野菜をかうと思う。

佐々木（淳）：農産物の味は、クリーン農法とは関係がない。高い野菜は、売れない。流通市場では、安定供給がとても重視されるが、そのためには、一定程度の農薬が必要。農家は、悪い農薬は使っていると思っていない。

坪井：この問題については、消費者と生産者の話し合いの場が、継続的に必要と思う。

佐々木（淳）：確かに、そのような話し合いの場は必要と思う。ニセコ町の新規就農者は、自然農法を志向している人がほとんどだが、成功していない。農薬を使うことは、農家にとって、コストが引き上がる要因のため、本当は使いたくない。

坪井：行政は、消費者と生産者の話し合いの場を作ってほしい。そのテーマは、環境保全型農業をどのようにして推進できるか、ということ。

佐々木（淳）：P60 戦略推進プランの農業部分に関連施策が述べられているが、生産者の立場からは、それらの施策の落としどころが見えないものばかりだ。

山本：ニセコ町では、北海道認証制度の YES!clean の認証農家が多い。気候がそもそも冷涼で本州に比べて農薬が少なくすむし、それに YES!clean のブランドも加わって、ビュープラでも売れている方だと認識している。生産者と消費者の話し合いの場は有益だと思う。

佐々木（淳）：農家としては、減農薬の割合をどの程度として求められているのか、その

落とし所が見えないのが困る。

吉川：農業と健康の関係について、具体的なデータなどの資料があると良い。

斉藤：いろいろな疑問があると思うが、各々について議論を極めることは難しいので、総合計画の中では、課題への取組を表明することしか無いのだろう。その方向に向けた記述が欲しい。

山本：今回の見直しは、今後の4年間に向けたもの。

梅田：他分野の施策を横断的に組合せ、横串を刺して、11の戦略を実現しようと言うのがニセコ町総合計画の大きな特徴であり、そのための手順が、シナリオとして示されている。シナリオはまだ不十分なものだろうと思うので、今後、行政と住民と一緒に充実させていることに取り組むのが、この総合計画の精神だ。

斉藤：横串が、どのような構造でなされるのか、説明の表現がわかりにくい。

梅田：考え方は、P45のフロー図に示されているが、横串を具体的に実現した施策というのは、まだ存在していない。今後の課題だと思う。

斉藤：横断的な施策の組合せを、町民主体で考えていく、という組立はどうか。今後の検討課題として明記するのも良いと思う。

山本：横断的に絡んでいる、という包括的認識の上に立っての表現が、現時点のものだ。

牧野：あまり具体的に書かない方が広く解釈できるので、現状の表現で良いと思う。

梅田：委員長の指摘に沿って、P91の戦略推進プラン18-②の中に、関連する施策を横断的に組合せることを分野間で情報共有して取り組む、という表記は可能かもしれない。

山本：あるいは、P92の18-③の新しい公共の中に示してもいいかもしれない。

吉川：基本的な質問だが、この計画の実行主体は誰か？

山本：町であり、町民である。

吉川：具体的に何を行い、その検証は誰が行うのか？

山本：住民アンケートとその結果についての分析が、検証結果であり、P148以降に示している。

梅田：資料3-2は、実際に行う事業リストである。役場はそれを行い、住民がその結果をアンケートで検証する、という流れになっている。

斉藤：横断的施策の組立は、事務局に任せたい。

【職員の質の向上について】

上野：前回話したことは反映されているので、ありがたい。それらに関係して、役場職員の中には、応対する際に子どもへの愛情や配慮が感じられない人もいる。もっと、役場職員の意識改革や質的向上を図る施策も必要ではないか。特に、パート職員が勉強する機会に恵まれていないことも残念に思う。町全体で、子育てを支援するという方針を掲げているのに、そうでない実態もある。

山本：ご指摘の問題点は認識しているので、P94の19-②のなかに、職員の質の向上についての施策を掲げている。役場全体で、すぐにでも、認識の共有を図りたい。

【商工業の可能性について】

竹石：自分が申し上げた問題点については、大部分盛り込まれている。その中で、特に、

商店街がニセコの人口規模と見合った適正規模の商圈なのかに関する分析事例があるのか、について伺いたい。

山本：ニセコ町の商圈の適正規模に関する客観的な分析データはない。

竹石：業種ごとの商圈の適正規模がどの程度なのかがわかると、起業・創業の目安になると思う。また、ニセコの商店街は、ニセコ町民を対象としているのか、それとも、観光客をターゲットとしているのか。

牧野：個店の努力と魅力がないと、いかに商圈があってもダメだと思う。個店の魅力が形成されれば、商圈は、住民から観光客へと広がっていく。しかし一方では、個店レベルの対応だけでは、商店街が面的に形成されることは難しい。行政として、商店街の形成に向けた土地区画整理などの取組も必要だ。

佐々木（眞）：宿泊業を営んでいるが、この5年間ほどで、国内外客の長期滞在が増えてきた。1ヶ月から2ヶ月にも及ぶ滞在客は、地元の人に評判のいいお店を探して行くようなので、店づくりのターゲットとしては、町民が優先されるべきだと思う。その結果、観光客にも喜ばれる。

山本：長期滞在客が増えると、ビュープラザの客が増える傾向にある。また、市街地のお店にも、外国人が普通に訪れるようになり、顧客層が広がっている。

鈴木：町民に向けたビジネスを続けていけば、観光客は、地元の文化に関心を持っているため、長期滞在観光客も関心を寄せるはず。二次交通のデマンドバスが、観光的にも利用できる、観光客の送迎や、倉庫群などの利用も組合せて、商圈が大きく多様に広がっていく可能性がある。異なる領域の様々な政策を横断的に組合せることで、新たなビジネス展開のストーリーが可能になる。そのような政策の組合せがよりわかりやすく検討できるような、組合せに関する横串のフローチャートがあると便利だ。

梅田：P34～のシナリオとそのフローチャートは、そのつもりで作成したものだが、まだわかりにくいようなので、次回見直しに向けて、作り直すなどの検討が必要かもしれない。その際、横断的な横串体系は、縦割り行政にとっては苦手な方法論なので、住民の積極的な関与によって、実現を図ってほしい。

齊藤：戦略ビジョンのシナリオにステップが記述されているが、面的な前進、それとも、質的な上昇、のどちらなのか、読んでみてもわかりにくい。

梅田：これから、町民と行政の議論の場を設けて、検討していくというのはどうか。

佐々木（眞）：P44の「ソーシャルビジネス」とは、どういうものか？

梅田：通常市場では成立しにくい需給関係にある地域課題について、たとえばエコマネーを媒介したり、一部にボランティアな手法を組合せるなど、緩いビジネスとして持続的な市場を形成していく手法を指している。

佐々木（眞）：浦河のベテルの家、などもそうか？

鈴木：松戸市の「何でもやる課」や、フィルムコミッションなどによる地域ビジネス起こしなども、そうだと思う。

平島：高齢者福祉やサービスの世界でも、共助を基本としたソーシャルビジネスが見られる。また、生活は横断的なものなので、施策についても横断的に組合せないとならぬ効果を発揮できない。その中で、住民の優先的ニーズを重視して進めるべきだ。

【農産物のブランド化について】

齊藤：数点、指摘したい。P53の4-⑥は、内容を反映する表現として、「高速交通体系」ではなく「総合交通体系」とすべき。P54の4-⑧は、実態を反映する表現として、「林道・農道」を削除した方が良い。P61の6-⑪は、農産物のブランド化についての施策だが、産地全体で取り組むべきブランド化については、地域の農家の合意形成に向けて意向を把握する必要があると思う。

山本：ニセコでは、小さく生んでチャレンジを続け大きく育てていくのが、ブランド形成の流れになっている。関係者で合意を図って一緒に進む、というより、やりたい人が先鋭的に始めていって、次第に他の人も参加していく、という形があるように思う。

齊藤：ブランド化は結果なので、小さく生んで大きく育てるというのも、その通り。

山本：時間をかけてブランド化していく。蘭越米なども、その一例と思う。

佐々木（眞）：「ブランド」という言葉には、良いイメージがない。

山本：ブランドとは、魅力ある個性、ということ。

坪井：産地形成がポイントと思う。

佐々木（淳）：農産物としては、「ニセコ」が既にブランドになっているのが、市場の実態だ。

吉川：ニセコの産物を売る場所があるといい。ビュープラザがそうあってほしいが、それが難しければ、町で独自に確保してはどうか。

佐々木（淳）：野菜の量り売りをする店があるといい。ビュープラザも、事前のパッキングで手間がかかってコストが嵩んでいる。安売りではなく、サービスを高める方向が重要。

【MICEについて】

齊藤：P69の8-⑤で、「大規模な会議」とあるが、大規模な会議は都会に任せて、ニセコの身の丈にあった規模の会議等の誘致で良いのではないか。

梅田：別の方から、ニセコは既に大規模な会議を誘致できる力を持っているので、条件整備を含めて、大規模な会議誘致を目指すべき、という声もあるが、どちらの戦略をとるか、総合計画の記述としては、どちらかよいか。

齊藤：大規模と言えば、2千人～3千人の規模をイメージするが、ハードとともにサービスなどのソフト面の整備が必要。それらに対応するには、現在のニセコでは無理がある。大規模とはどのくらいの大きさを想定しているのか、それを含め、適切な表現を工夫してほしい。

山本：4年前は、MICEはまだまだ先の目標だったが現在は既に開催している。その運営にもこなれてきたので、ニセコの実態に見合った表現にしたい。

牧野：ニセコでは会議が開催されている方なので、その成果を地域がしっかり吸収できる仕組みがほしい。

【会議録の確認について】

山本：今日の会議の記録については、またフィードバックしたいので、確認してほしい。今日のご意見をどのように反映するかなどについては、この後、事務局と齊藤委

員長で相談して決めたいので、任せてほしいが、良いか？

佐々木（一）：会議録は、WEB上で公開することになるが、発言者としてみなさんのお名前を記しても良いか？

斉藤：みなさんはいかがでしょうか？

（同意）

山本：それでは、了解いただいたので、会議録の内容をご確認いただいてから公開したい。

斉藤：会議を閉めます。